

## イギリス国民党の後退と移民をめぐる言説の変容

### The retreat of the British National Party and its changing discourse on immigration

吉田公記 (法政大学大学院)

Koki YOSHIDA (Hosei University, Graduate School)

キーワード：イギリス, 反移民政党, 人種主義, 福祉ショーヴィニズム

#### ■本報告の問い

イギリスでは近年、移民問題が比較的高い関心を集めていることが、世論調査(\*1)によって明らかにされている。そうした中、反移民政党として知られるイギリス国民党(British National Party ; 以下 BNP)は、2000年代の数々の選挙で躍進を遂げ、党勢を拡大した。例として、5年ごとに実施されるヨーロッパ議会選挙の結果(\*2)の推移を示そう。支持が最高潮に達し、2議席を獲得した2009年選挙の結果を1999年選挙の結果と比較すると、得票数は約9.2倍(99年：10万2647票→09年：94万3598票)、得票率は約5.5倍(99年：1.13%→09年：6.2%)に増加した。しかし2010年代に入ると、移民問題それ自体は依然として社会的に関心を集めながらも、BNPの党勢は後退に転じた。例えば2014年選挙では得票数17万9694票・得票率1.14%の結果となり、躍進前の99年選挙に近い水準まで支持が落ちた。では何故、2000年代に台頭したBNPは、2010年代に入り後退に転じたのか。この問いに取り組むための足掛かりとして、本報告では同党の言説に注目し、2000年代の台頭期と2010年代の後退期を分ける質的な変容を明らかにする。

#### ■先行研究の検討

2000年代のBNPの台頭を説明しようとする研究群では、党の「現代化」についてしばしば注目されてきた(e.g. 力久、2011)。なかでも、言説の「現代化」に焦点をあてたDaphne Halikiopoulou and Sofia Vasilopoulou(2010)は、台頭前後の選挙マニフェストを比較分析し、ナショナル・アイデンティティの解釈が人種的なものからシヴィックなものへと変容したことを明らかにした。しかし本報告では、台頭期の言説の「現代化」(ナショナル・アイデンティティ言説のシヴィック化)という見方に懐疑的・留保的な立場を採る。なぜなら、Nigel Copsey(2007)やJohn E. Richardson(2011)も指摘するように、BNPの言説は一面的に捉えられるものではなく、むしろ重層的な一つまり、選挙の際に有権者に向けて発する言説(=選挙言説)と日常的に発する言説(=日常言説)とで質的に異なる二重の言説から構成される一ものだったのである。そこで以下では、台頭期の日常言説と選挙言説の質的な違いを明らかにすることを議論の出発点とする。次に、後退期の選挙言説を分析し、台頭期からの変容を明らかにする。

#### ■分析資料

- ①日常言説：BNPウェブサイトの“NATIONAL NEWS”セクションにおいて、2009年6月20日から同年7月25日にかけて配信された記事(\*3)
- ②台頭期の選挙言説：2009年のヨーロッパ議会選挙および統一地方議会選挙マニフェスト
- ③後退期の選挙言説：2011年の統一地方議会選挙および2014年のヨーロッパ議会選挙マニフェスト

#### ■考察

上記資料の分析から、以下のことが明らかになった。

まず①日常言説では、移民=非白人・第三世界出身者とするかたわら、彼らが意見を代表していると考えられる人々

をイギリス人＝白人・土着の人々とする対立構図が明確に浮かび上がる。つまり、ネーションを人種的に理解し、移民を他者化しているのである。その上で、移民の犯罪性向や文化的差異といった逸脱性を強調・批判する人種主義(e.g. Barker 1981)、および雇用機会の剥奪や住宅不足の発生、医療制度の濫用といったイギリス人の社会保障にかかる負担を批判する福祉ショーヴィニズム(e.g. Mudde 2007)の主に 2 つのテーマから言説が構成されている。

一方で②台頭期の選挙言説は、総じて既成政党が掲げるような公約の範疇におさまるものだった。移民に関する言及に絞ると、福祉ショーヴィニズムが見て取れる。しかし、移民と福祉の問題は当時、既成政党や労働運動でも取りあげられるほど、社会的・政治的アジェンダとして広く共有された問題だった(*The Guardian* (online), January 30, 2009)。一方で文化に関する議論では、移民に批判の矛先を向けるというより、自文化の公的保護を主張することが中心だった。つまり、日常言説で見られる人種主義的な言説は見られず、その意味で、台頭期の選挙言説と日常言説とは異質だったと言える。

しかし③後退期に入ると、移民をめぐる選挙言説には人種主義的な要素が出現し、日常言説に質的に接近する。＜自己(イギリス人)＝文明＞－＜他者(移民)＝野蛮＞という二項対立が打ち出され、移民の逸脱性を主張する事例が列挙されるのである。加えて、福祉ショーヴィニズムについても、議論がより具体化されている点を見ることができる。

#### 【注】

- 1 Ipsos MORI “The most important issues facing Britain today”の“Issues index: 1997-2006”(December 19, 2006)、および“2007 onwards”(March 25, 2014)。抄録ではスペースの制約上、ウェブアドレス等の記載を割愛する。以下同様。
- 2 数値データについては、BBC の各選挙特集ウェブページを参照した。
- 3 UK Web Archive の 2009 年 7 月 11 日および同 26 日アーカイブ版ウェブサイトで公開のもの。

#### 【主要参考文献】

- Barker, Martin, 1981, *The New Racism: Conservatives and the Ideology of the Tribe*, London: Junction Books.
- Copsey, Nigel, 2007, “Changing course or changing clothes? Reflections on the ideological evolution of the British National Party 1999–2006,” *Patterns of Prejudice*, 41(1): 61-82.
- Halikiopoulou, Daphne and Sofia Vasilopoulou, 2010, “Towards a ‘civic’ narrative: British national identity and the transformation of the British National Party,” *The Political Quarterly*, 81(4): 583-592.
- Mudde, Cas, 2007, *Populist Radical Right Parties in Europe*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Richardson, John E., 2011, “Race and racial difference: the surface and depth of BNP ideology,” Nigel Copsey and Graham Macklin eds., *The British National Party: Contemporary Perspectives*, Abingdon: Routledge, 39-61.
- 力久昌幸, 2011, 「イギリス国民党の現代化プロジェクト——極右急進主義からナショナル・ポピュリズムへ」河原祐馬・島田幸典・玉田芳史編『移民と政治——ナショナル・ポピュリズムの国際比較』昭和堂, 26-56.